

眼は野生の状態 で存在する

長谷川 晶子

HASEGAWA Akiko

京都産業大学 外国語学部 助教

専門分野：フランス文学（シュルレアリスム研究）

略歴

2010年パリ第七大学大学院博士課程修了（文学博士）。東京と広島で非常勤講師をへて、2012年より京都産業大学外国語部に助教として着任。

最近の主な論文・評釈

- 「眼差しのオートマティスム—1920年代のアンドレ・ブルトンの文学論・美術論における〈狂気〉」『狂気のディスクルス』夏目書房、2006年。
- 「シュルレアリスムの展示におけるデビズマン—マン・レイのタブローと島々のオブジェ展から反植民地博覧会へ」『水声通信』第23号、水声社、2008年。
- 「1920年から1942年のアンドレ・ブルトンの審美的思考においてプリミティヴィズムの果たした役割」パリ第七大学に提出した博士論文、2010年
- 「バタイユとブルトン—イメージと芸術の誕生をめぐるふたつの思考」『別冊水声通信バタイユとその友たち』水声社、2014年。

研究紹介

最近京都市美術館で行われたルネ・マグリット展カタログの翻訳に協力しました。また2015年春には元指導教官の本の翻訳に携わることができました。少しでも恩返しできて、幸せに思います。



研究テーマ

20世紀の芸術運動シュルレアリスムを主な研究対象としています。シュルレアリスムはおそらく芸術運動としてもっとも長く続いた芸術運動のひとつで、世界中の様々な都市で展開しました。その成功の秘訣を特に芸術理論に光をあてて探っています。

研究の道へ進んだきっかけ

大学3年生の頃、授業を通じてシュルレアリスムの作家アンドレ・ブルトンの文章に出遭い、その不思議な魅力にとらわれました。彼のテキストをもっと理解できるようになりたいと感じて、大学院に進学しました。

研究者になってよかったと思うこと

好きな研究を続けられることです。同じ関心をもつ研究者の

仲間と情報を共有しあって、考えを深めたり、視野を広げたりできるのも楽しいです。最近研究会（関西シュルレアリスム研究会）を仲間と共に立ち上げたのですが、会に参加してくれる若い研究者たちからたくさん刺激をうけています。

座右の銘

「眼は野生の状態で存在する」（アンドレ・ブルトン）

研究とプライベートの両立で工夫していること

義務として何かをこなすとルーティンになってしまうので、研究もプライベートも限られた時間内にできる限り集中して楽しむことを心がけています。実際のところ、頭を切りかえるのは本当に難しいのですが…。また、頭でっかちの四角い人間にならないよう、美しい風景を食べたりおいしいものを食べたりして、常に感覚を鈍化させないよう、心がけています。

人生の転機になった一冊／学生に薦めたい一冊

アンドレ・ブルトンの『シュルレアリスムと絵画』（巖谷國土監修、人文書院、1998年）

わたしはこの本の冒頭にある「眼は野生の状態で存在する」という一文に魅了されて、研究の道に進みました。非常に難解で何をいっているのかわかりにくいテキストなのですが、一文一文に詩が凝縮しています。一語一語丁寧に時間をかけて吟味して解読する読書というものが存在することを学生さんたちに知ってもらいたくて、これを選びました。同時に、与えられたレールに乗って何となく人生を送るのではなく、自分の中に存在する野生の声に耳を傾けて、自分の人生を選びとってもらいたいという願いもあります。

未来の研究者へ一言

研究者になるまでに辛い時期が必ずあると思います。自分の

選んだ道であるなら覚悟を決めて、楽しむ余裕を持ちながら、精進してください。祖母がよく「若いときの苦勞は買ってでもしなさい」と言っていました。苦勞は実は単なる苦勞ではなく、自分を育ててくれるものなのだと思います。

